

# *A Passage to India* における Adela Quested の探求の旅

---

林 田鶴子

---

## I

*A Passage to India* は Mosque, Caves, Temple の三部から成るが、その各部の最初の章、つまり、第1章、第12章、第33章は登場人物がそのパートで繰り広げるドラマの舞台設定であり、状況説明である。この三つの章の中で特に読者の注意を引くのは、“Except for the Marabar Caves . . . the city of Chandrapore presents nothing extraordinary” (p. 2)<sup>(1)</sup>と書き出され、途中洞窟と山への言及は一切ないまま、“League after league the earth lies flat . . . Only in the south, where a group of fists and fingers are thrust up through the soil, . . . These fists and fingers are the Marabar Hills, containing the extraordinary caves” (p. 4)と冒頭の一節と呼応するように締めくくられる第1章ではないだろうか。Forster が小説の冒頭でこのように Marabar Caves の “extraordinary” な点と、“fists and fingers” に象徴される Marabar Hills の暴力性<sup>(2)</sup>を強く読者に印象づけようとしていることは、洞窟と山がこの小説において重要な役割を担わされていること、しかもその役割が複雑な意味合いを帯びた性質のものであることを先ず読者に知らせたいがためであると考えてもよいだろう。

平板な大地から “fists and fingers” となって突き出、獲物を掴もうとする、或いは既に手中に握り込んでしまった奇怪な怪物じみた Marabar Hills の異様な山容は、見る者を魅了するというよりは、むしろ怖じ気させるものだ。ところがこの山は或る状況下で、“look romantic in certain lights and at suitable

distances” (p. 119) と変身するのである。“certain lights” とは夕方の陽の光であり、“suitable distances” とは山から Anglo-Indians の居住地までの距離である。暴力的な意味合いの濃い、赤裸々すぎて受け入れ難い様相が山の現実の姿であるとするならば、魅惑的な姿で人の目を引き、誘き寄せようとする山は、苛酷な現実に向って立ち向かうことのできぬ人々のための、言わば、薄められた現実を意味しているといえよう。<sup>(3)</sup>

インド人との友好を目的に催された Bridge Party が期待した程の成果もなく終わってしまった後で、Adela Quested は仲間から独り離れて Marabar Hills を眺めている。その時彼女が “How lovely they suddenly were” (p. 41) と心の中で感嘆するのは、この変身した山に向かってである。更に続いて、“But she couldn't touch them. In front, like a shutter, fell a vision of her married life” (p. 41) と嘆息する時、そこには山に “touch” したくてもできない Adela の自己抑圧的な声が既に聞き取れよう。しかも Adela の “touch” したい山が直接的には “romantic” で “lovely” な姿に変身した Marabar Hills であるとしても、その山は先にみたように、“extraordinary” な洞窟をその懐に抱き、それ自身は “fists and fingers” である山なのだ。Marabar Hills と Adela Quested の深い係わり合いは、Forster が登場人物の中で特に Adela にその山を眺めさせていることに明示されているが、その関係には Adela の一方的な思い入れにすぎない片手落ちな面がある。それ故、Adela に与えられた課題が “romantic” で “lovely” な山の姿とは別の山の姿への開眼にあるということは、「探し求めた」「探し求められた」の両義的意味を内在させる Quested という名前<sup>(4)</sup>からして既に容易に察せられよう。

Adela は探求のテーマそのものを意味するといってもよい。外界に圧殺されている心の声をいかに意識化し、行動に反映させるかという魂の救済のテーマを追いつけた Forster にとって、Adela Quested の様々な体験は彼女の同類である Rickie, Miss Abbott, Lucy, Helen 達が見せる心の揺れと本質的には同じものであるが、彼女の葛藤はインド即ち “an unexplainable muddle”<sup>(5)</sup> という厄介な舞台の上で一層複雑に屈折し、捉え難いものになっている。Adela は “I want to see the real India” (p. 19) という言葉と共に舞台上に登場し、その発言

で彼女にも未知な “real India” 探求の旅を宣言する。

## II

Adela がここで「本物の」インドと強調せざるを得ないのは、インドに着いて以来見聞きしてきたインドがどうも贗物臭いと思われぬからだ。居住地のクラブ会館を中心に営まれる Anglo-Indians の日常生活は、すぐ手の届くインド人の生活の場バザールに繋がろうとはせず、遠い本国との絆を弱めまいと必死でイギリス的なものに執着する有様である。本物のインドに背を向けた彼等の生活の滑稽さは、泥の中で蠢いているような貧しい下町のバザールが、高台に陣取った居住地からは熱帯の樹木にすっぽり蔽われて、まるで “a city of gardens” (p. 2) のように見えるということに、また現地の新鮮で豊かな食料を顧みず、本国から取り寄せた不味いビン詰類で満足しているということに具体的に描かれている。インドは彼等にとって目の前を流れていく “colour and movement” (p. 41) の帯にすぎず、その背後にある人々の息遣いから彼等は顔を逸むけている。このような Anglo-Indians のインドが “newcomers who would view everything with an equal if superficial eye, and would not turn on a special voice when speaking to his guests” (p. 57) の一人である Adela の目に贗物臭く映るのは当然であろう。しかしこれを贗物だと撥ねつけ、一途に “real India” を求めることは Adela にとってそう簡単なことではない。何故なら、Ronny Heaslop との結婚問題に決着をつけようと遙々インドまでやって来た Adela の前に現われた Ronny は、既に Anglo-Indians の一員になりきっていたからである。

Adela はこの窮地 “something that was both insidious and tough” (p. 41) を覚悟し、それと闘うための同盟者を探し求める。彼女は Bridge Party で知り合ったインド女性 Mrs Bhattacharya と、インド人の教育に携わり、インド人か Anglo-Indians かの二者択一で前者を選び取った Fielding に白羽の矢を立てるが、インド女性との友好の進展は “an unexplainable muddle” のうちに呆気なく終わってしまう。Fielding の方はといえば、Adela を “the girl's a prig” (p.

110)、“She depressed me” (p. 110) と評価せず、彼女の期待に答える素振りも見せない。二人が Adela の求めに応じなかったのは、彼女の側に二人を受け入れる心の準備ができていなかったためである。つまり Adela はインド女性との約束を、その場の雰囲気全体から相手の真意を捉えようとする東洋的な意思疎通の手段としての “truth of mood” (p. 65) ではなく、言葉に最大の重点を置く西洋的な “verbal truth” (p. 65) で判断したために、また Fielding が “she goes on and on as if she’s at a lecture – trying ever so hard to understand India and life, and occasionally taking a note” (p. 110) と評するように、Adela は Anglo-Indians とは別の次元にいるにもかかわらずインドが象徴する総体としての生に対して全身でぶつかっていかうとしない意識過剰の上滑りな態度によって、自ら好機を逸したのだ。

この二人に代わって Adela が得たインドとの唯一の接点が Aziz であったのは、彼女に Aziz を受け入れる下地があったからである。その下地とは夕方の “romantic” で “lovely” な姿に変身した Marabar Hills をうっとり見入る Adela のロマンティズム志向であり、見るだけでは物足りずそれに “touch” したいと願わせる性的意味合いの濃い願望である。そんな彼女は Mrs Moore から夜のモスクでの Aziz との感動的な出会いを聞かされると “This sounds very romantic” (p. 24) と忽ち関心を示し、“Was he nice?” (p. 25) とロマンスの主人公に相応しいかどうか尋ね、Aziz が回教徒だと知るや “A Mohammedan! How perfectly magnificent!” (p. 25) と感嘆し、面白くもない『従妹ケイト』を観劇している間に夫人が楽しんできた “little escapade” (p. 24) を内心羨みながら、それに深い共感を覚える。この時点で既に Adela は “While we talk about seeing the real India, she goes and sees it” (p. 25) と異国の素敵な若い医師 Aziz を “real India” と同一視している。

欲しいのは “picturesque” (p. 22) なものや “frieze” (p. 41) ではなく、“spirit” (p. 41) だとどんなに声高に Adela が主張しようとも、彼女の心を現実にかす対象物は “romantic” な要素に色どられた造り物じみたものばかりである。Adela が “romantic” なものの影響を受けやすいということは、Ronny との出会いがロマン派詩人ゆかりの地 “grand scenery of the English

Lakes” (p. 76) であったことや、Ronny には既に過去の思い出となってしまった “callo academic period of his life which he had outgrown – Grasmere, serious talks and walks, that sort of thing” (p. 246) から Adela が今尚抜け切れないでいるということに読み取れよう。また Ronny に結婚しないと打ち明けた時、相手の自尊心を傷つける加害者として当然耐えねばならぬと覚悟していた “her ordeal” (p. 76) が自分に何らの悲痛な思いも与えずに呆気なく終わってしまったことに対し、Adela は “it should have been more painful and longer” (p. 76), “a profound and passionate speech ought to have been delivered by one or both of them” (p. 77) とその場の劇的でない状況を悔しがる。しかし、彼女の方から積極的にそのような状況を作り出そうとは決してせず、ただ物足りなさを覚え、その欲求不満を心の奥に仕舞い込むだけである。

この告白の場面のすぐ後で、Adela に前言を取り消させ、婚約に踏み切らせるに至った主たる動機が、迫り来る夕闇の中で Ronny の顔の輪郭がぼやけるといふ、“an event that always increased her esteem for his character” (p. 79) にあったのも当然といえよう。Adela に結婚を躊躇させた Ronny の短所の数々はインドの強烈な陽の光で白日の下に曝されるのだが、その短所を闇が一時的にせよ包み隠してくれたからだ。夕闇が Adela に与える効果の大きさは、彼女と現実の間には常に一種のヴェールが必要だということを意味している。そのヴェールは “living at half pressure” (p. 228) と自ら評する生彩に欠けた彼女の退屈な日々を鮮やかに色取り、“romantic” で “dramatic” (p. 86) な雰囲気と状況を作り出す。しかしその状況と雰囲気は、絶対に彼女の心の許容限度を越えた “extraordinary” なものであってはならないという制約つきであり、その制約は底知れぬ未知の深淵を抱える己の魂を探求する旅立ちへの決定的な障害となっている。

### III

この Adela の障害を取り除く手助けをするのが、彼女に “real India” とみなされ、“when she knew him better, he would unlock his country for her” (p.

63) とまで見込まれ、“his life, though vivid, was largely a dream” (p. 60) という日々を送る Aziz である。彼は西洋医学を学んだ医師であるが、“It was his hand, not his mind, that was scientific” (p. 47) とあるように、科学的論理性は彼の存在の表層を占めるにすぎず、その奥には、“semi-mystic, semi-sensuous” (p. 310) の広大な領域が広がっている。彼は植民地化されている祖国の現状に心を閉ざし、遙か昔のイスラム帝国の栄光に心の拠り所を求め、現在の不幸を慰めている。現実にも目を向けようとしない点で Adela に似ているものの、Aziz の精神生活が “deep below his normal surface” (p. 108) を本拠地とし、そこからの声を圧殺することなく充分聞き入れていることを考えれば、Aziz は Adela の影 “Shadow”<sup>(6)</sup> であり、その Aziz が Adela の道案内を務めるのは至極当然の成り行きといえよう。

Aziz が Adela を案内するのは、彼女が “touch” したいと願っていた Marabar Hills である。彼女はこの Aziz の計画に小躍りし、“Then tell me everything you will, or I shall never understand India” (p. 67) と夢中になる。ここで成立した Aziz=India=Marabar Hills の等式は以後の Adela の行動を考察する上で重要な意味を持つ。というのも Marabar Hills、厳密には Marabar Caves において、Adela は Aziz を媒介として India (=彼女の魂) への道を模索する手がかりを掴むのだから。

事件が起こる Marabar Caves<sup>(7)</sup> について作者がどのようなイメージを “extraordinary” という言葉に付与しようとしているかは第12章に明示されている。洞窟を抱く大地は “older than anything in the world” (p. 116), “incredible antiquity” (p. 116), “untouched” (p. 116) と形容されているように、人間の営みとは無関係に存在し、その大地から聳え立つ山容は、“something unspeakable” (p. 116), “like nothing else in the world” (p. 116), “no relation to anything dreamt or seen” (p. 117) としか言いようがなく、正に “extraordinary” の一語に尽きる。更に洞窟は、“Nothing, nothing attaches to them, and their reputation . . . does not depend upon human speech” (p. 117), “nothing is inside them, they were sealed up before the creation of pestilence or treasure; . . . nothing, nothing would be added to the sum of good or evil” (p.

118) のような価値づけがなされており、是非の判別をしなければ落ち着けない人間の、特に西洋人の心の次元とは全く異なる次元にある。このいかなる定義をも撥ねつける無色透明な実体こそ、“normal surface” の奥に厚い鉱脈となって連なり、その中にあるのはプラスにもマイナスにも傾かない中立的性格を帯びた無意識の連なりではあるまいか。洞窟を抱く Marabar Hills へ赴くことは、己の深奥へと下り立つことと同じ謂であり、そこは人が己の未だ知り得ぬ姿と対峙する試練の場なのである。<sup>(8)</sup>

#### IV

Most of life is so dull that there is nothing to say about it, . . . Inside its cocoon of work or social obligation, the human spirit slumbers for the most part, . . . There are periods in the most thrilling day during which nothing happens, . . . and though we continue to exclaim “I do enjoy myself” or “I am horrified” we are insincere. . . and a perfectly adjusted organism would be silent. (p. 125)

これは小説のクライマックスを目前に控えてなされる Adela と Mrs Moore の置かれている状況の総括である。人生は Adela がそうあるべきだと断定しているように常に “important and interesting” (p. 125) で、冒険に満ち溢れているものではない。日々の単調さに耐え切れぬ心だけが何か浮き立つものを求め、それに “I do enjoy myself” or “I am horrified” とかいった意味づけをしているにすぎない。作者からのこのようなメッセージに続いて、“cocoon” の中で二人の態度が “the elder lady accepted her own apathy, while the younger resented hers” (p. 125) と指摘されるが、“apathy” に対するこの二人の受けとめ方の相違は、取りも直さずこれから二人が受けねばならない洞窟内での体験に対する二人の対応の相違を先取りしているといえよう。つまり Mrs Moore が彼女の体験を “her despair, her own weakness” (p. 141) の問題として処理し、他人には一切衝撃の色を見せずただ自己の内へと後退していただ

なのに対し、内部処理のできない Adela は自分の体験を持って余し、Aziz に襲われるというかたちで外に放り出したのである。では一体どうして襲われるというかたちをとらなければならなかったのか、またどうして Aziz でなければならなかったのだろうか。

襲われる “insulted” (p. 154) という行為は<sup>(9)</sup> Adela の場合 “touch” されるかされないかという観点から捉えるのが妥当であろう。Adela は Aziz に “touch” されそうになったのだが、この点に関して彼女は “He never actually touched me once” (p. 185) と明快に否定している。洞窟を逃れ、夢中で山を駆け下りる Adela の身体に何百本というサボテンの棘が突き刺さるが、その棘を抜き取る Miss Dereck と Mrs McBryde の指の感触が “developed the shock that had begun in the cave” (p. 184) とあるのは、“touch” という行為及びそれに纏わりつく想念が Adela に大きな意味を持っていることを示唆している。

棘を抜かれながら “In space things touch, in time things part” (p. 184) と Adela が心の中で幾度も呟く言葉は、彼女が非難して止まなかった Miss Dereck と Mrs McBryde の勢力下に自分が置かれてしまった現状に対する、更には “animal contact at dusk” (p. 143) がもたらした Ronny との思いも寄りぬ婚約に対する深い反省の声であるといえよう。この声は更に高まって、次のような隠者的言葉を Adela に吐かせる。

I feel we ought all to go back into the desert for centuries and try to get good. I want to begin at the beginning. All the things I thought I'd learned are just a hindrance, they're not knowledge at all. (p. 188)

一から遣り直さなければならぬと痛感している Adela が彼女を迎えに来た Ronny に、“I don't want your arm, I'm a magnificent walker, no, don't touch me” (p. 188) と彼の介添えを強く拒むのは当然である。しかし彼女が唯一の救い主と頼みにする Mrs Moore に二度まで冷たくあしらわれると方向を見失ない、ためらいがちではあるが再び Ronny に接近しようとする。“... said Adela, leaving the sofa and taking his arm; then dropped it with a sigh and sat



down again”. (p. 191)

“In space things touch, in time things part” の後半の節には、Adela が本当に “touch” したいものが手から滑り落ちていく空しさと失意がこめられており、その具体例を事件後の Adela と Mrs Moore の関係にみることができる。事件解決を願う Adela が “Only Mrs Moore could drive it [the echo] back to its source, and seal the broken reservoir” (p. 185) と夫人に全幅の信頼と期待を抱いて、事件後初めて夫人の待つ宿舎に戻り、挨拶を交しながら夫人の手を取るが、洞窟での体験によって己の内へと後退していきだけの Mrs Moore の手はすぐに引っ込められてしまう。二度目の Adela の試みも冷たく拒絶される。Mrs Moore との関係にみられるこの明快な “in time things part” の展開とは別に、Adela の心の奥でより厄介な内密の問題が渦巻いていることを見逃してはならない。

## V

この問題解明の手がかりとして、洞窟に入る直前の Adela の心理状況から検討してみるのが適当であろう。“She went into a cave, thinking with half her mind ‘Sightseeing bores me’ and wondering with the other half about her marriage”. (p. 144) 彼女は Ronny と婚約し、後は彼との Anglo-Indian 的結婚生活を待つのみという “labelled” (p. 85) された境遇にあり、“her main interest would henceforward be Ronny” (p. 126) と限られた行動範囲を強いられている。そのために以前はあれ程 “touch” したいと思っていた Marabar Hills も彼女の心に何の感動も与えない。しかも彼女の心を無感動にさせている Ronny を本当は愛していないことに初めて気づき、愕然となる。この不意打ちに一瞬たじろぐが、すぐに結婚は愛がなくてもやっつけていけるものだとして自己弁明し、足場を固めなおす。しかしその一方で、“Was she capable of loving anyone?” (p. 202) と人を愛することへの彼女の潜在能力に問を投げかけずにはいられない。Aziz の結婚生活に関心を向けることで彼女自身の問題から目を逸らそうとするが、そのことがきっかけとなって、彼女の手を引いて案内役を務めている Aziz を突如男として、しかも肉体的魅力を具えた男性として意

識し始める。“What a handsome little Oriental he was . . . and she regretted that neither she nor Ronny had physical charm. It does make a difference in a relationship – beauty, thick hair, a fair skin. Probably this man had several wives”. (p. 144)

彼女自身 Aziz に対して “any personal warmth” (p. 144) を抱いていないと思っ  
てはいても、美人に目のない Aziz に “terrible defects” (p. 61) だと思わ  
せる程の骨張った身体と雀斑だらけの顔をした Adela が、美しい者を羨望と嫉  
妬の目差しで眺めたとしても不思議ではない。入廷後 Adela の目に最初に飛び  
込んでくる “almost naked, and splendidly formed” (p. 207) で “strength and  
beauty” (p. 207) を持った卑しい雑役夫の姿、“strong, neat little Indian with  
very black hair, and pliant hands” (p. 209) と映る Aziz、“a fine-looking man,  
large and bony, with gray closely cropped hair” (p. 210) のインド人裁判官の  
姿、これら肉体的魅力を具えた男性への関心は、作者自身の同性愛的関心とも  
重なって、Adela の性的に抑圧されている心を垣間見させてはいないだろう  
か。<sup>(10)</sup>

Adela が Aziz に襲われたという直前、彼女が洞窟の壁を “scratching” (p.  
184) し、“struck” (p. 185) していた行為は彼女のこの性的抑圧と深く係わっ  
ているはずだ。“most marvellously polished” (p. 117) されている壁はその表  
面を境にして内外二つの世界を、つまり日常的・社会的生活を営む自我と、そ  
の水面下にあって非日常性・非社会性を本領とする “imprisoned spirit” (p.  
117) を映し出し、その両世界がせめぎ合う中で Adela は自分の心の奥の奥を  
覗き見る機会を与えられたのだから。更に、“finer than any covering acquired  
by the animals, smoother than windless water, more voluptuous than love” (p.  
118) と描写される洞窟の壁が、“fists and fingers” である Marabar Hills の  
“skin” (p. 118) であると擬人化される時、Adela が “scratching” し、  
“struck” したものが、実は彼女を強く印象づけた Aziz の “fair skin” であっ  
たと解釈できよう。Adela の識閥内では “She had struck the polished wall –  
for no reason” (p. 185) であるかもしれぬが、彼女の無意識においては充分な  
根拠が見出し得るのである。

Adela は洞窟の “fair skin” を手がかりに、それを体現している男性へと向かい始める。性に関して Aziz のように “hard and direct” (p. 94) になれない Adela は、丁度洞窟の壁に映ったマッチの炎と本物の炎が “approach and strive to unite” (p. 117) し、二つの炎が “touch one another, kiss and expire” (p. 118) するようには、どんなに努力しても内の己と外の己とが融け合い、一体化せず、内の己に “touch” する寸前恐怖心が先に立ってそれに立ち向かえず、狂ったように洞窟から飛び出してしまうのである。洞窟内の事件は Adela が自ら創作し、演じた “rape” 妄想である。<sup>(11)</sup>そして、サボテンの山を棘に刺さりながら駆け下りる苦痛を彼女が身に引き受けるのは、Aziz が決して “touch” しなかったこと、即ち内の己が “imprisoned” されたままであることへの自虐的反作用の為せる業であり、そうしてのみ Adela は “I am up against something” (p. 251) と自己分析してみせる “something” と対決できたのではあるまいか。

対象を “romantic” で “manageable” (p. 128) なものに変えて初めてそれと向かい合うことに慣れてきた Adela は、それまで覗き込もうともしなかった自己の暗い深淵と思いがけず対峙させられて動転し、その “shock” を Mrs Moore のように個人的問題として受け入れることができず、Aziz 暴行というかたちで外に放り出してしまうのである。しかし冷静を取り戻した Adela が Fielding との対話の中で、洞窟内での体験を “hallucination” (p. 230) と診断し、更に具体的に “the sort of things – though in an awful form – that makes some woman think they’ve had an offer of marriage when none was made” (p. 228) と分析する時、彼女の告白には Gino への愛を Philip に打ち明ける Miss Abbott と同じ真摯さが読み取れる。Marabar Caves の体験を心の中の事実としてではなく、単に “hallucination” としか認めることができないところに Adela の限界はあるものの、それでも尚 Aziz の住む “dream” に近い深層からのメッセージを “hallucination” として受け取ったということは、Adela の “real India” 探求の旅の一成果であり、彼女が魂の救済へ一歩近づいたことを意味するものである。

## VI

Adela に “spirit” の世界からのメッセージを受け取る潜在的能力が具わっていることは、裁判中廷外で合唱される “Esmiss Esmoor” (p. 214) という言葉の響きが彼女に与える影響から読み取れる。

A new and unknown sensation protected her, like magnificent armour. She didn't know what had happened, or even remember in the ordinary way of memory, but she returned to the Marabar Hills, and spoke from them *across a sort of darkness* to Mr McBryde. The fatal day recurred, in every detail, but she was of it and not of it at the same time, and this double relation gave it indescribable splendour. (p. 216) [イタリック体は筆者による]

“spirit” の世界への Adela の関心は “ghost” (p. 88, p. 229) の存在を信じ、“telepathy” (p. 251) を持つとされる Mrs Moore への盲目的ともいえる程の信頼感、依存度の強さに示されており、インドの神 “Esmiss Esmoor” となって Adela の前に現われた夫人の霊が、彼女を “spirit” の世界へ導くのである。Adela の、問いには必ず明快な答えがあるはずだとする理論の堅い殻の下に、曖昧模糊とした “a sort of darkness” の領域があり、この暗い部分があるからこそ Adela はこの暗さの原初とでもいうべき洞窟の中で、壁の向こうから呼びかけられたのではなかったか。しかし Adela はその呼びかけに驚くのみで返答するだけの余裕はない。それができたのはイギリス人の中で Mrs Moore 唯一人であり、その彼女でさえ “spiritual muddledom” (p. 198) に足を取られ身動きできず、死をもってしか答えられないのである。

この “darkness” の危険性を充分承知しているのは Fielding である。彼は “solid ground” (p. 169) を確保するために常に “equilibrium” (p. 109), “mental balance” (p. 181) に心がけ、“facts” (p. 156), “information” (p. 181) によって物事を正確且つ正当に評価しようと努力する西洋の合理主義の

体現者である。その彼から “real person” (p. 233) になったと漸く認められ、以前手に入れ損ねた同盟者の資格を与えられた Adela は、その見返りとして、実証され得ない “hallucination” 説を棄て、Fielding の主張する具体的な地元のガイド犯人説を受け入れる。<sup>(12)</sup> Forster は、“Both man and woman were at the height of their power – sensible, honest, even subtle” (p. 252) と二人を高く評価するが、それでも尚彼等に “wistfulness” (p. 252) を与え、二人を “dissatisfied” (p. 252) にさせる作者の姿勢は、“another world” (p. 252) , “the shadow of the shadow of a dream” (p. 252) を拒む二人への作者の不満の表明であり、西洋の合理主義だけでは解明し得ない領域が存在することを Forster は暗示するのである。この限界から二人を救うのは、Mrs Moore の子供であり、Ronny には異父弟妹に当たる Ralph と Stella である。

## VII

Adela のイギリスへの帰国の旅は彼女のインド滞在の総括であり、同時にそこからの再出発を物語っている。ボンベイまで Adela を追って来て、Fielding の情婦だったと彼女を脅迫する召使い Anthony のグロテスクともいえる一件は、Adela が Aziz、或いはインドに与えた “extraordinary” な犠牲と損傷に対するインドからの報復である。また西洋への入口とみなされるエジプト停泊中、アメリカ人宣教師が Adela に語りかける “turn” と “returning” の言葉遊びには “moral brightness” (p. 254) 以上の深い意味を読み取るべきである。

Suddenly, in the Mediterranean clarity, she had seen. Her first duty on *re-turning* to England was to look up those other children of Mrs Moore's, Ralph and Stella; then she would *turn* to her profession. (p. 254) [イタリック体は筆者による]

Mrs Moore が Ronny と離して育てたという、つまり本質的に Anglo-Indian の性格を具えた Ronny とは別種だと暗示されている Ralph と Stella が、Adela

のインド旅行を完結させる重要な鍵となって登場する。Adela は Mrs Moore 以上に神秘的な Stella を Fielding に紹介し、二人を結婚させることによって、冷徹な頭脳の持主 Fielding を “half deaf and half blind” (p. 308) の状態に陥れ、“darkness” の存在を常に身近なものとして受け入れざるを得ない状況を作り出す。彼女はまた、Ralph に金銭的援助を与えて Stella のインド行きに同行させ、イギリス人を敵視し始めた Aziz に彼を会わせることによって、Mrs Moore の後継者たるべき Ralph との新たな友情への道を Aziz に切り開いてやる。Stella と Ralph もインドに行くことによって、イギリスでは癒やされなかった “restlessness” (p. 309) を解消し、“something soothing, some solution of her queer trouble” (p. 309) を見い出す。

他の宗教の低迷する中で新たな可能性を与え得ると Fielding の示唆するヒンズー教に Stella と Ralph が深い関心を抱いていること、更に二人の関心がその宗教の外面的な “forms” (p. 310) に向かっていないということは重要な意味を持っている。何故ならヒンズー教の “God si love” (p. 276) の世界は神との神秘的合一を目ざし、森羅万象全ての救済という理想郷を揚げるが、この “the unknown” (p. 278) の世界に達するには “logic and conscious effort” (p. 277) の成果ともいえるべき “science” (p. 298), “history” (p. 298) 更には “beauty” (p. 298) さえも犠牲にされねばならず、特にヒンズー教にみられる西洋的美意識の欠如は、Forster にとってヒンズー教接近への最大の障害になっているといってもよいからだ。<sup>(13)</sup> Stella と Ralph がヒンズー教の “forms” 以外のもの、即ちその内面的精神性に深く傾倒しているということは、Forster が描く最大の “another world” であるヒンズー教の世界に通ずる道がここに提示されていると考えてもよいからだ。

Stella と Ralph の高い精神性は、二人が真理に向かう行進において Aziz, Adela, Fielding の一団を大きく引き離して遙か前方を歩いていることにはっきり示されている。しかしその精神性が日常的な社会生活の中で安定した地位を得ているかという点、そこには尚問題があるように思われる。それ故二人が世間に向ける顔は Godbole の “an air of daring and coyness” (p. 169) に似て、自信と気恥ずかしさが交錯する奇妙な表情を帯びており、“another world” とは

無縁の Ronny の目には、Ralph が “almost an imbecile” (p. 297) と映る一方で、Fielding には “a wise boy” (p. 309) と思えるのである。彼等自身も、“They know . . . a certain side of their lives is a mistake, and are shy” (p. 310) と感じざるを得ないのである。

Adela は Forster にとって希望の星ともいべき Stella と Ralph を探し求め、彼等をインドに送り込む努力とその成果によって、自らも救われ、Stella から “Marabar is wiped out” (p. 308) と審判を下され、彼女の “real India” 探求の旅を完結させる。彼女はまた、大きな犠牲を払わせた Aziz から、“For my own part, I shall henceforth connect you with the name that is very sacred in my mind, namely Mrs Moore (p. 310) と、夫人の意志を受け継ぐ Stella と Ralph の口添えによって漸く許しの言葉を受け取ることができた。イギリスに戻ってからの Adela の “an artistic and thoughtful little suburb of London” (p. 266) での生活は、彼女を Ronny と結びつけた “Grasmere, serious talks and walks” のそれと一見代わり映えしないように見えるし、彼女が Stella と Ralph 探しのヒントを “Mediterranean clarity” から得たことも、Adela の “intellectualism” (p. 201) の根強さを裏づけてはいるが、元の巣に戻るまでに彼女の心に刻みつけられた数々の体験が、新たに “turn” し直した彼女の生活を、その外観はどうであれ内面的に大きく変えてしまったことは確かであろう。彼女は Fielding が再評価するように、“no longer examining life, but being examined by it” (p. 233) であり、“real person” になったのだから。

## VIII

A Passage to India のみならず Forster の全作品に共通する特徴は、人物一人一人が展開してみせる “an inner war, a struggle for true values, a struggle of the Individual towards the dark, secret place where he may find reality”<sup>(14)</sup> であり、その闘争が激しければ激しい程作品の緊張感が高まり、同時に読者の関心も喚起される。Forster の場合 “reality” は徐々に得られるものというよりは、むしろ “symbolic moment”<sup>(15)</sup> として突如眼前に開示される場合が多い。その

瞬時を捉えるか逃がすかでその人物の運命、或いは評価は決定される。このような一瞬一瞬の決定論ともいえる運命観が支配する世界にあって、この“symbolic moment”を独力で捉えることができる人物は稀れで、ほとんどの場合取り逃してしまう。しかしその後で余儀なくされる自己欺瞞的生活は、最初から真理を得ている人物によって正しい方向へと軌道修正され、最終的には救済される。LucyはMr Emersonに、RickieはAnsellに、またMargaretはMrs Wilcoxに助けられ、取り逃した“symbolic moment”を無事手中に収める。Adelaの場合、洞窟内でそれを逃がし、更にその責任をAzizに暴行というかたちで転嫁したために、その罪が“echo”となって彼女を苦しめる。<sup>(16)</sup>Adelaの救済者Mrs Mooreからの援助は、自らも混乱の直中にある夫人の苦しみが癒やされる彼女の死まで待たねばならない。ここでは救済者自身も悩み苦しんでおり、救いへの道は各自の“inner war”にその大部分が委ねられている。裁判に敗訴したAdelaが“inner war”において勝利を収めたのは、“the dark and secret place”への心の準備が彼女にできていたからであり、Mrs Mooreの強い影響下にありながらも、Adela自身“brave”(p. 308)で“courage”(p. 308)ある行為をとったからだといえよう。

*A Passage to India*ではGodbole, Mrs Moore, Aziz, Fielding, Adela それにStella, Ralphを加えた全員が各々異なる次元においてであるが“inner war”を闘っている。それは突き詰めていけば神の世界を前にした人間の内的葛藤であり、全てを受け入れる代償に人間的なもの一切の放棄を強要する苛酷な“silence”の世界と、それに耐え切れず徒に言葉を弄ぶ“echo”の世界の対立抗争である。<sup>(17)</sup>この対立を一挙に突き崩す唯一の手段は“religious ecstasy”である。<sup>(18)</sup>しかしそれがいかに魅力的で“a beautiful and radiant expression”(p. 275)を喚起するものであっても、“a beauty in which there was nothing personal”(p. 275)にすぎず、個人的関係を重んじ、<sup>(19)</sup>“struggle of the Individual”を強調するForsterには受け入れ難く、それ故に不十分な能力を最大限に発揮させて、“Come, come, come, come”(p. 281)と呼びかけることしかできないGodboleの姿が、Forsterに表現し得た唯一の神との出会いではなかったろうか。Forsterが、東洋人でありながら西洋を調和的に摂取している



Godbole に可能性を認めたと同じ理由で、西洋人でありながら東洋を内に持ち、“Then you are an Oriental” (p. 17, p. 301) と Aziz に叫ばせる Mrs Moore, Stella, Ralph に可能性を認め、ヒンズー教に強い関心を示す Stella と Ralph を小説の最終部でわざわざ東洋に送ったのは、Forster 自身の “real India” への旅の代理人としてではなかったであろうか。

### 注

- (1) E. M. Forster, *A Passage to India*, The Abinger Edition of E. M. Forster Volume 6, ed. Oliver Stallybrass (London: Edward Arnold, 1978). 以下、本稿におけるこの小説の引用頁はこの版による。
- (2) Allen は Schopenhauer の象徴論を引き合いに出して “fists and fingers” に注目しながらも、結局は合理主義的解釈に止まっている。Glen O. Allen, “Structure, Symbol and the Theme in E. M. Forster’s *A Passage to India*”, *PMLA*, LXXX (1955), p. 945 参照。
- (3) 山と同様、インドを代表するガンジス川についても作者はその二面性を強調している。Mrs Moore が “What a terrible river! What a wonderful river!” (p. 26) と川の両面を受け入れるのに対し、Adela は月光を広大な水面一杯に受けて輝く “wonderful” な川には共感するが、人食い鱔の棲む “terrible” な川には無関心なまま、彼女の一面的な受容の仕方において、Mrs Moore との相違を際立たせている。
- (4) Quested という名前に注目しているのは筆者の知る限りでは Finkelstein 唯一人である。Bonnie Blumenthal Finkelstein, *Forster’s Women: Eternal Differences* (New York: Columbia Univ. Press, 1975), p. 128 参照。
- (5) Forster は W. Plomer 宛ての手紙の中で、小説の主題について次のように述べている。“I tried to show that India is an unexplainable muddle by introducing an unexplainable muddle – Miss Quested’s experience in the cave.” E. M. Forster, *Selected Letters of E. M. Forster Volume Two: 1921-1970*, ed. Mary Lago and P. N. Furbank (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1985), p. 125 参照。
- (6) Stone は C. G. Jung の “Shadow” 説を応用して、洞窟での Adela の体験を説明している。しかし彼が Adela を Fielding にのみ結びつけて、Aziz との関係を考慮に入れないのは、Adela の複雑な精神的葛藤を軽視するものではないだろうか。確かに Adela は intellectualism の点において Fielding と深く結びついてはいるが、彼女の

- 中には Fielding の閉め出した世界が未だ幾分か残されており、その意味で Stone の Adela 像には不満が残る。Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1966), p. 335参照。
- (7) 洞窟の意味については様々な議論がある。1961年以前の諸論は Louise Dauner が *MFS*, VII (1961), p. 259にまとめているので参照されたい。それ以降については代表的なものを次に挙げる。“the gigantic symbol of primal India” [Alan Wilde, *Art and Order: A Study of E. M. Forster* (New York: New York Univ. Press, 1964), p. 136] , “the primal womb from which we all come and the primal tomb to which we all return” [Stone, *The Cave and the Mountain*, p. 307] , “the neutral substratum of the universe” [Frederick P. W. McDowell, *E. M. Forster* (New York: Twayne, 1969), p. 105.]
- (8) 洞窟は一つのシンボルとして様々な意味内容を持つが、その中で Adela に該当するものとして次のものが挙げられる。“the place of union of the Self and the ego”, “a place of initiation and the second birth”, “that which is hidden”, [J. C. Cooper, *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols* (London: Thames and Hudson, 1987), p. 31.]
- (9) Forster は初期の原稿 (1913-14) で Adela が Aziz に実際に襲われる場面を描いたが、そのために筋の展開に行き詰まる。後に事件を不透明なものにすることによって、Adela をより複雑な人物に仕上げ、小説に深い内面性を与えることができた。
- (10) 事件直前 Adela が “meagre Ronny” とは正反対の “ideal lover”, “perfect mate” に思いを巡らしていることは興味深い。E. M. Forster, *The Manuscripts of “A Passage to India”*, ed. Oliver Stallybrass (London: Edward Arnold, 1978), p. 229参照。
- (11) “Rape” という語は White によって初めて使用された。それは Adela と Ronny の “union by force and fear, without love” な関係から引き出され、登場人物全員の人間関係に拡大されている。[Gertrude M. White, “A Passage to India: Analysis and Reevaluation”, *PMLA*, LXVIII (1953), pp. 641-57.] また、Dauner は女性原理の場としての洞窟が Adela につきつけた “union, initiation, potency” を “rape” として体験したと述べている。[Louise Dauner, “What Happened in the Cave? Reflection on *A Passage to India*” *MFS*, VII (1961), p. 268.] Stone は前述の “Shadow” を Adela が “as a kind of rape of the personality” と判断したと解している。[Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain*, p. 336.]
- (12) ガイド犯人説に賛同するや否や、“the question had lost interest for her suddenly” (p. 230)とあるように、Adela の “hallucination” 説への心残りが示されていることを見落してはならない。

- (13) Forster をヒンズー教の世界の真髄に触れさせた宗教行事 Gokul Ashtami がその深遠な哲学によって彼を震撼させる一方で、彼の目に “frivolity”, “triviality”, “silliness”, “no dignity”, “no taste”, “no form”, “fatuity” と映るだけのその外観は大いに彼を戸惑わせ、残念がらせた。E. M. Forster, *The Hill of Devi and other Indian writings*, ed. Elizabeth Heine (London: Edward Arnold, 1983), pp. 60-73 参照。
- (14) E. M. Forster, “The Individual and His God”, *The Listener*, 5 Dec. 1940, p. 802.
- (15) E. M. Forster, *The Longest Journey*, ed. Elizabeth Heine (London: Edward Arnold, 1984), p. 256.
- (16) “echo” の消長は Adela の精神状態のバロメーターになっている。
- (17) 作品中 “silence” と “echo” が対照的に述べられているのは、“Outside the arch there seemed always an arch, beyond the remotest echo a silence” (p. 46) である。
- (18) Forster は生まれて初めて “religious ecstasy” を目の当たりに見たと述べているが、彼の反応は “I . . . don't take to it more than I expected I should” と冷ややかである。 [Forster, *The Hill of Devi and other Indian writings*, p. 64. ]
- (19) Forster は Malcolm Darling 宛ての手紙の中で、ケンブリッジから得た personal relationships 信奉がインド体験によって微妙に変化したことを次のように述べている。“King's stands for personal relationships, and these still seem to me the most real things on the surface of the earth, but I have acquired a feeling that people must go away from each other (spiritually) every now and then, and improve themselves if the relationship is to develop or even endure. A Passage to India describes such a going away – preparatory to the next advance, which I am not capable of describing. It seems to me that individuals progress alternately by loneliness and intimacy, and that legend of the multiplied Krishna . . . serves as a symbol of a state where the two might be combined. The 'King's' view over-simplified people: that I think was its defect. We are more complicated, also richer, than it knew, and affection grows more difficult than it used to, and also more glorious.” [Forster, *Selected Letters Volume Two*, p. 63.]